

## 死の解釈

さて、ここ数回にわたり、死と生について、主にインド思想の流れから仏教思想に添って、考えを進めてきました。「輪廻」「転生」はその流れの主流をなすものでした。

中村元氏は自ら著した『佛教語大辞典』の中で、仏典から「死」の意味を5つに分けて示しています。①死ぬこと。②死人。③死神。④死すべき者。人間。⑤死によって不律儀を捨てること。そして、

ゴータマ・ブッダは、人間は死ぬべきものであることを明らかにし、「一切の生きとし生けるものは、死ぬべき存在 (P: maraṇa-dhamma) である。死を終わりとするもの (P: maraṇa-pariyosāna)、死を超えないもの (P: maraṇa-anatīta) である」と述べている。(中略) 東洋人は、死に徹することを通して人生を積極的に生きるという人生観を共通してもっていたとみられる。(中村元『佛教語大辞典』上巻、東京書籍、昭和50年、535頁。[Pはパーリ語])

と、解説します。

人間は死すべき存在であるからこそ、死を前提とした生き方をすべきだということでしょう。また、この辞典の5番目の意味を斟酌してみると、生きていた人間というものは「不律儀」なことをしてしまう者であるということが分かります。だからこそ、次生では「律儀」であろうとして、死を次の生への区切りとして捉えられるのかもしれませんが。

## キリスト教と死

一方、キリスト教に代表される「一神教」的な世界観を持つ教義で、死はどのように集約されているのでしょうか。たとえば『旧約 新約 聖書大事典』では、「死はあらゆる民族において、様々な、相互に矛盾さえ含む反応をもって複雑に受けとめられている」とした上で、旧約聖書(ユダヤ教)における死を二つに分けて叙述されます。その1は、「死は(非物質的)霊魂と(物質的)肉体との分離ではなく、神から人間に一定期間与えられた生命の息、すなわち生命力の喪失を意味する(創世記2:7など、一部略)」というものです。これは、さらに、「死者は死の国、陰府での実体のない存在に引き渡される」「死は人間の<運命の>一部である」「死は怪物、あるいは原初の混沌と結びつき、敬虔なるものを絶えず脅かす」というような表現が旧約聖書から導かれます。そして、「こうした事情にあっても、旧約において、<死に対する神の優越性>」は疑うことのできないものであって、「神によって死が滅ぼされる」ことを予見させることばもあるとしています(その2は省略)。

次に、新約聖書における死については、以上の旧約における死を前提として、次のようにまとめられています。

- ・死ぬことは呼吸が止まること
- ・死は罪の報酬
- ・人間は死によって神から確実にまた永遠に隔絶される

さらに、新約聖書は、死の霊的側面を強調するという特徴があり、「不信仰の結果として神から遠ざけられる死」「第2の死」が語られているとされます。イエスは同時代のユダヤ人のように死の世界にいくつかの領域があるというようなことを言って

いるように見える箇所(ルカ16:22以下など)もある一方で、死者の復活を特に述べてもいる(マルコ12:18~22)と書かれています。

そして、次のように続きます。

新約における死についての教説の特異性は、<死の力が打ち破られてしまった>、ということであろう。復活はキリストにおいて、部分的であるとはいえ、すでに決定的な事実となっているのである。キリストの復活によりメシアによる救済の時代の開始が根拠づけられる。キリストは死に勝利した。彼はいったん死の力に完全に引き渡され、我々の代わりに神と人から見棄られることの恐怖を味った。その彼の苦難を通してイエスは、罪の報酬としての死を特徴づける破綻、孤独、無を自らに引き受けたのである。それゆえ、今や、死も何ものもキリストの贖いの業を受け入れる者を活ける神から引き離すことはできない。(以上、『旧約 新約 聖書大事典』教文館、1989年、530~531頁)

このようにして、旧約聖書で説かれた死、すなわち、生命力の喪失やいのちの期間の終わり、怖れるべきものは、その死よりも優越する神によって打ち負かされることになります。それは新約聖書におけるイエスの贖罪の死という観念によって意味づけられて、「復活」という信仰を完成させていったようです。したがって、死の恐怖は、イエスの死によって克服され、イエスに結び付いた信仰によって、人々の「死」の理解は「永遠のいのち」につながるようになります。

人間の現実的な死あるいは死への怖れは、イエスの死によって「永生の生命という信仰」として形成されていったように見えます。復活の希望というものが、キリスト・イエスを信じる人々を死の怖れから解放しているようです。

この「死の克服」「死への勝利」とも思われる態度について、『キリスト教神学事典』においては、次の叙述を読むことができます。

新約聖書は死を絶対的な敵対勢力として見ている。パウロによればアダムの罪の結果であり(ロマ書5:12)、滅ぼされるべき最後の敵である(1コリント書15:26)。パウロはキリストの復活が、人を罪と死との力から解放したと考え、もはや罪も死も人を支配する力を持たないと強い確信を言い表している(ロマ書6~9章および、1コリント書15章の多くの箇所)。(中略) イエスの復活が新約聖書の中心主題であり、それが弟子たちの死に対する態度を変革せしめたものであるという点では異論のないところであろう。イエスの復活こそは、…死後の生命への確信を与えるものであったのである(A.リチャードソン/J.ポウデン編、古屋安雄監修、佐柳文男訳『キリスト教神学事典』教文館、1995年、248頁)。

人間にとって、死をどのように解釈し、どのように受け止め、どのように克服するのは、まさにどのように生きていくかということに直結していることが理解できます。それは、私たちが紛れもなく「死ぬ」という存在であるということ、それに向き合う大切さを、常に問いかけ続けているようです。